海外生活レポート

アフガニスタン 11

Norko Dethlefts（紀子・デスレフツ）さん

春の気配を感じるようになりました。市街戦で倒壊した建物の陰の生い茂った雑草の中に、小さな水仙が芽を出しているのを見つけました。

ツーリズム省？それともテロリズム省？

この度、アフガニスタンの国会は戦争犯罪に加担したとして糾弾されている将軍その他の人々への恩赦を認めることを可決したそうです。レイプ、殺人などの残虐行為を行った者たちは法の裁きを受けなければならないと主張して複数の人権団体がこの決議に強く抗議していますが、この国ではそうした輩が裁判で判決をくだす当の本人であることが多いのです !!

とはいえ、批判的なことを余り口にしすぎないように注意しなくてはならいとは、特に数週間前にテロリズム省に呼び出されて以来、肝に命じています。私は最初、この省の名称はトゥーリズム〔Tourism：観光〕という英語のスペルミスだとばかり思っていたのですが、何ということでしょう、テロリズム〔Terrorism〕省というのが実在していたのです。

滞在ビザの延長許可を受ける前に自分がT〔タリバン？〕ではないことを証明するため、私たちはこのテロリズム省へ出頭するよう言われたのです。その日は雨の降る寒い日でしたが、建物から建物へ泥道を歩いて、いくつものオフィスに顔を出さねばならず、靴を脱いだり履いたり大変でした。ところがあるオフィスで、１人の男が泥だらけのブーツを履いたままつかつかと入って来たので、私は、「貴方もブーツをお脱ぎになってはいかが？」と言ったら、その男性は「これはわたしのオフィスで、ここのルールはわたしが決めるのだ！」と、さも自慢げに言うのです。権力を賢く使うということは、他の人々に良い手本を見せて部屋を清潔に保つことではないかしら―そう言ってあげたかったのは山々でしたが、そのような意見は自分の胸の中にたたんでおく方が賢いと判断しました。

大学での手伝いは極秘事項！？

口に出して言ってはいけないことはたくさんあります。たとえば誰の手伝いをしているかを他言しない、というのもそのひとつで、そうしないと他の人の嫉妬を招くからです。私は数人の大学教授の授業準備のお手伝いをしているのですが、教授たちの誰もが、他の人にこのことを口外しないで欲しいと言うのです。だから、ひとりが私を訪ねて来ると、他の人がひょっこり現れて現場を取り押さえられるのではないかと気を揉みます。なんだかまるで不義密通みたいです。でもこれまでの経験から、ここでは私たちのやり方が必ずしも通用するとは限らないということが、よく分かるようになりました。

フルブライト奨学金で２年間アメリカに留学したある女性教授は、国に戻ってから同僚たちから村八分にされ、まだ教授として復職できずにいます。

親の願いは…

私が定期的に訪問する、絨毯織りの仕事をしている愛すべき未亡人の女性たちは皆、読み書きが出来ません。でもみんな、自分の子供には教育を受けさせなければならないという固い信念をもっていて、そのための努力を惜しみません。その効果的な唯一の方法は子供を私塾に通わせることです。というのも、公立学校では先生の大部分が読み書きができません。そのうえ寒い時（12～３月）も暑い時（７・８月）も学校は休みになるのですから、残る短い期間に生徒で溢れかえる教室で半日の授業を半年間受けただけでは、子供たちはなかなかアインシュタインにはなりません。

生活の最低限のニーズが満たされた後に多くの人々が次に望むのは、教育を受けること、そしてサウジアラビアのメッカに大巡礼ハッジ（Hajj）に出かけることです。大巡礼から戻った人は賞賛の的となり、称号を与えられて人々から敬われます。

心ある若者が選ぶ道

こちらの人のものの考え方は確かに宗教に深く根ざしているのですが、高等教育を受けた比較的若い世代の人々の中には、より広く学び、この国の将来について思いを巡らす人もいます。ただ、そういう若者たちはごく一部のエリートです。かれらはこの国の古臭い経済政策や、年配者への遠慮から新しいものごとの導入ができない自分たちの職場の状況に大きな不満を感じています。素晴らしい若者たちが絶望の果てに「何かをすることが許されるようになったら、きっと戻って来てこの国の役に立ちます」と約束しながら海外に仕事や学びの場を求めて出て行ってしまうのを、私は何度も涙しながら眺めてきました。

新たな決意

そして夫のロジャーもわたしも同様に、２年間ここに居て達成できたことの余りの少なさに少々気落ちしています。おそらく、そのためでしょう。あと１期は残って引き続き頑張ってみるべきではないかという気持になり、少なくとも2009年 9月まではここで働き続けることに同意しました。ここで仕事をさせていただけることに感謝し、私たちの背中を押してくれる友人たちからの愛と祈りを、そしてその日その日を神様の力づけを得て歩めることを感謝しています。

愛と感謝を込めて心からのご挨拶を送ります。

紀子

おめでとう!! KIAN100号

～編集ボランティアから～

「KIAN創刊 100号」おめでとうございます！

青柳　尚子

私は創刊当初から、KIANの編集にボランティアとして関わってきましたが、もうそんなに経つのですね…当時、お腹の中にいた娘が高校生になっているので当たり前のことなのですが、「光陰矢のごとし」とはまさにこのことです。

最初は川崎市国際交流協会のスタッフの皆さんと手さぐりで、いろいろなアイデアを出しあい、２ヶ月に１回発行していました。現在は３ヶ月に１回となり余裕があるはずなのですが、やはり締切りぎりぎりまで悩みます。

取材を通して、勉強になったことはたくさんあります。例えば、お互い心を開いて話をするためには時間が必要なので実際は記事の何倍もお話ししています。このことは国際交流においても同じではないでしょうか？目に見える成果に行き着くまでは、地道に信頼関係をつちかっていかなくてはならないでしょう。取材では失敗したり、いやな思いをしたりしたこともありますが、喜んでいただいたり、褒めていただいたりしたこともありました。そういったひとつひとつのことが「KIAN」という形になってあらわれていることをとても嬉しく感じています。

最後になりましたが、取材に協力してくださった方、国際交流協会のスタッフ、KIANのボランティア、そしてサポートしてくれた家族に感謝の気持ちを伝えたいと思います。「ありがとう。そして今後も楽しく読めるKIANをめざしたいと思います。」

100号を迎えて

福井すみ代

多くの方々のご支援にささえられて、KIANが 100号を迎えられました。１号は 1990年の３月でした。隔月の発行でカラー印刷、川崎市に在住する各国の方々との交流が紙面を通して伝わってきます。

ここに交流センターができる前は、市役所の側のビルの３階を借りて活動をしていました。 1994年 10月12日に今の所にオープン、「ともに生きる世界のかわさき」をテーマに沢山のイベントが行われました。「外国人による日本語スピーチコンテスト」も、この時から始まりました。

インタビュー、お国自慢、タウンガイド、スピーチコンテストの取材、日本語ボランティアの方々や、在住外国人の方々との座談会などを企画した特集記事作りなど、常にニュース・バリューのある「キャン」にするため、知恵を絞り、意見を交換した編集会議は充実した時となり、私にとっては楽しい時間となりました。

私は編集ボランティアに参加させて頂いて 15年余り、あっという間に時が経っていました。今、この喜びをひしひしと感じています。

この活動を通して各国の方々と交流し、今まで経験しなかった世界を発見できたことは、私にとって何よりの収穫。人生についての考え方を広げてくれました。

今までの蓄積を振り返りながら、これからの更なるご発展を心からお祈り致します。

編集後記

「外国人市民による日本語スピーチコンテスト」が２月 16日（土）に行われました。 11名の出場者の皆さんは滑らかな日本語で、自分の言葉でスピーチされていました。身振り手振りを交えての楽しい内容に引き込まれ、会場は温かい空気に包まれました。スピーチの後のインタビューでは「大変でしたが楽しかったです」と皆さん一様に満足された様子でした。

恒例の東京衣裳きもの学院の先生方による「着物ショー」で晴れ着に身を包んだ皆さんは、素晴らしい思い出になったと大喜びでした。

副賞として優勝者には川崎ライオンズクラブから商品券が、また参加者全員に創作集団「にほんご」から「中上級のにほんご」が、翌 17日には昨年に引き続き山下秀男評議員のご協力により相撲部屋（中村部屋）を訪問し、ちゃんこ鍋を囲むという楽しい催しが行われました。

相沢　明子

川崎市国際交流センター
〒 211-0033　川崎市中原区木月祇園町 2番 2号
TEL 044― 435― 7000　FAX 044― 435― 7010
http:// www.kian.or.jp/ kic/